

中村元 慈しみの心

1 総合

山陰中央新報

中村元 慈しみの心

No.415

蓮華の香りは花弁にあるのではない。茎にあるでもない。雄しべ、雌しべにもない。ただ蓮華にある。

(釈迦)

△解説▽花の香りの出所は？ 花弁にも茎にも雄しべ・雌しべにもなく、花から出ているという。おのおのが香りを発しているのではなく、集合して発している。発言も口や頭ではなく、体が発言している。ものは集まり依りて活動しているからである。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2016.12.31 中村元記念館協力

2016年(平成28年)12月31日(土曜日)

中村元 慈しみの心

No.414

思い出は夢と見、感覺するものはいなびかりと見、心の知覚は雲と見ること。

(『大乘起信論』)

△解説▽さまざまな思い出は夢のように消え去る。見たり、聞いたり、味わったり、嗅いだり、触れたりしたものも刺激的でも一瞬になくなる。心のはたらきは、わき出る雲のようにすぐに変わる。みな無常である。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2016.12.30 中村元記念館協力

2016年(平成28年)12月30日(金曜日)

中村元 慈しみの心

1 総合

山陰中央新報

中村元 慈しみの心 No.417

広く蔓延したつる草も、一本の根づ
るを切るだけで、みな萎んで枯れる。
(『法句譬喻経』)

〈解説〉振り込め詐欺の悪事が世
に蔓延しているが、ボスを捕らえな
いと、この悪事はなくなる。四
方に延びたつる草を枯らすには、根
元を引き抜くこと。そのように世の
四苦八苦をなくすには、妄執をなく
すことだと教える。

田上太秀・駒澤大名学教授

2017.1.3 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月3日(火曜日)

中村元 慈しみの心 No.416

琴の音色は弦だけ弾いても出てこな
い。しかし琴を弾くと音色が出る。
(『大般涅槃経』)

〈解説〉琴にかぎらず、楽器の音
は部品から出ているのではない。琴
自体から出ている。打った両手から
出る音は右か左か。打った手から出
ている。世の動きはみな個々のもの
が集まり依存して現れていると知ら
なくてはならない。

田上太秀・駒澤大名学教授

2017.1.1 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月1日(日曜日)

中村 元 慈しみの心

1 総 合

山 陰 中 央 新 報

中村 元 慈しみの心

No.419

心を守り、言葉を守り、体の動きに注意する人は、悩みに対しても苦しめない。
(釈迦)

△解説▽まず心のはたらきを制御し、落ちつけて、言葉を慎み、さらに己の行動を反省して慎む人は、悩ましいことや煩わしいことがあっても感わされることがない。心と言葉と行動をつねに慎むことが最高の善行という。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.1.5 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月5日(木曜日)

中村 元 慈しみの心

No.418

線香が己の身を焼き、香りを発散し、消えゆくように、人は三毒に焼かれ、滅びる。
(『四十二章経』)

△解説▽人がほしいままに名声を求めるのは、線香が身を焦がして、香りを薫らせているに似る。名声をむさぼり、おごりの心を起す人は身を滅ぼす。気がついた時は後のまじ。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.1.4 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月4日(水曜日)

中村 元 慈しみの心

No.421

蓮華は高地には育たないが、汚泥の池に生え育つ。そのように、煩惱の汚泥のなかに住む凡夫こそ、諸仏になる芽を出す。
(『維摩経』)

△解説▽華麗な蓮華は清水の池には育たない。乾燥した高地にも育たない。かえって汚泥の池にあって、その養分を得て育っている。煩惱が渦巻く世間に生まれ、育ち、学び、そして抜きんでたのが諸仏である。だから諸仏は生類の心が読める。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.1.7 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月7日(土曜日)

中村 元 慈しみの心

No.420

渴欲は枯れ草を束ねたたいまつのようにである。
(釈迦)

△解説▽枯れ草を束ねたたいまつは燃えやすく、はげしく燃える。風に向かうと、手や腕にやけどを負わせ、わが身も焼かれることになる。渴欲もわがままを通して悪事に走り、無理を通そうとする。その報いが己の身に降りかかり、身を滅ぼすこととなる。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.1.6 中村元記念館協力

2017年(平成29年)1月6日(金曜日)